



伊良皆は、県の幹線道路である国道五八号、そして残波岬周辺のリゾート地区への観光のメインルートである県道六号線が接続し、交通の利便がよく商業区域を形成してきました。現在、嘉手納町の水釜から大木を縦断し、役場庁舎の脇を抜けて恩納村山田に至る「読谷道路」が整備されています。そのため今後は、広域

交通の要所

交通の流れが大きく変わり、今後の伊良皆を取り巻く環境は、大きく変化すると予測されます。

交通の流れが大きく変わり、今後の伊良皆を取り巻く環境は、大きく変化すると予測されます。県道六号線沿いには、県立読谷高等学校、村立古堅中学校が立地し、文教地区ともなっており、その環境整備が望まれています。



組踊「久志の若按司」から

伝統芸能の継承

伊良皆では「十五夜」や村芝居が盛んに行われています。組踊や伝統芸能も豊富で、伝統芸能保存会によって「久志の若按司」が上演されました。これらによる伝統芸能継承活動や青年たちの参加を促進しています。



古堅中学校



2010年1月、56年ぶりに新築された「神あさぎ」



尚巴志王の墓



伊良皆

プロフィール

伊良皆は、『絵図郷村帳』（一六四六年）・『琉球国高究帳』（一七世紀中頃）に「系らきな村」とみえます。東方の米軍基地内にあるサシジャームイに沖繩島の三山統一を果たした第一尚氏の尚巴志王の墓、それに隣接してその家来の平田ヌ子と屋比久ヌ子の墓があります。かつて生活用水として利用されたサシジャーカーは、比謝川支流である長田川の水源となっています。沖繩戦前は国道五八号を挟んで集落を形成していましたが、戦後は東側が米軍基地「嘉手納弾薬庫」として接収されたため、西側への移転を余儀なくされ現在に至っています。国道東側の米軍基地内には、かつての集落の名残が多くあります。



座喜味

プロフィール

座喜味は、座喜味城跡が頂にある丘陵南傾斜面に集落を形成しています。『絵図郷村帳』（一六四六年）や『琉球国高究帳』（一七世紀中頃）には「城村」とあり、伝承では、城村と座喜味村が合併して座喜味村となったと伝えられています。『琉球国由来記』（一七一三年）『琉球国旧記』（一七三二年）には座喜味村とありますが、『中山伝信録』（一七二二年）には「読谷山」とあり、また座喜味と称すると注記されています。また、読谷山総地頭も座喜味親方と称し、当村は同間切の主邑とされています。

二〇〇〇年十二月二日、ユネスコの世界遺産に登録された座喜味城跡は、日本復帰後に復元事業が行われるとともに、県内で最初の資料館として一九七五年に村立歴史民俗資料館が開館、さらに一九九〇年には村立美術館が開館しました。

歴史遺産と環境美化がマッチ

座喜味集落及び農業地域は、農村基盤総合整備事業により集落内道路及び農用地が整備され、一九八七年には農村アメニティーコンクールで国土庁長官賞を受賞しました。また、二〇〇五年には豊かな景観を育み、「癒し」と「安らぎ」を与える魅力ある地域



島まるみぬ瓦家



2005年6月完成 座喜味公民館



世界遺産登録による、座喜味城跡への入域客の増加に伴い、集落内の交通量も増えてきました。これからは、城跡周辺の周遊コースの整備も必要とされます。座喜味集落内の井泉や御嶽、拝所等はそのまま伝統的な集落を学ぶことができます。また、座喜味は婦人会を中心に各班毎に花壇を持ち、一九九七年には全国みどりの愛護功労で建設大臣賞を受賞、集落内は年中季節の草花が咲き乱れており、訪れる人々の目を惹きつけています。座喜味城跡に至る村道沿いには、一九八五年の島まるみぬ瓦屋の移築、そして、二〇〇二年に座喜味城跡見学者を含めた入客者の便宜に供するよう、集落内の拝所等を表した案内板を設置しています。